

小野隆一朗選手（帝京大学4年）

白糠町出身

好走でチームに貢献



写真提供・釧路新聞社

おのりゅういちろう／2001年4月21日生まれ。白糠中学校卒業後、駅伝部のある北海道栄高等学校へ入学。2019年12月、全国高等学校駅伝競走大会で1区（10km）を28分55秒と区間4位。北海道の選手で28分台を出したのは初めて。高校卒業後は、憧れていた箱根を走るため帝京大学へ入学。大学2年と3年時に箱根駅伝の1区を走る。昨年12月に開催された「第311回日本体育大学長距離競技会（10000m）」で28分36秒68を記録

最後の箱根駅伝。4年分の思いを襷に込めて

第

100回東京箱根間往復大学駅伝競走（以下「箱根駅伝」）が2024年1月2日・3日の両日行われ、7区（21・3km）に白糠町出身の小野隆一朗選手が出場し、1時間2分44秒で区間2位という素晴らしい成績を残した。

レース後、小野選手は「大学4年間の陸上生活で培ってきたものを全て出すことができました」と話した。小野選手が箱根駅伝に出場したのは3年連続3回目。1年時には右ひざの故障などがあり残念ながら箱根駅伝への出場がかなわなかったものの、2年時には念願の箱根駅伝への出場を果たし、1区（21・3km）を1時間1分51秒というタイムで区間8位。その年、帝京大学は往路を史上最高位となる2位という結果で終えた。

翌年99回大会も小野選手は1区で出場。1時間3分30秒で区間16位ながらもトップとのタイム差はわずか56秒と力走した。それでも小野選手は「自分の力不足が目立ったレースでした」と、レース後に悔しさをにじませた。その年、帝京大学は総合13位と、翌年節目を迎える第100回大会へのシード権を獲得すること

はできなかった。

2023年10月14日、帝京大学は箱根駅伝への出場権をかけて箱根駅伝予選会に出場。57チーム中3位という成績で箱根駅伝への出場権を得たが、その大会に小野選手の姿はなかった。

「新型コロナウイルスに感染し、体調を崩してしまいました。大会までに症状は回復したのですが、体力が戻らず出場することができませんでした。チームの仲間のおかげで箱根駅伝への出場権を得ることができたので、みんなには感謝の気持ちでいっぱいです」

こうした悔しい思いを胸に挑んだ第100回箱根駅伝。小野選手は補欠選手としてエントリーされた。補欠選手は大会当日、レース開始1時間前の最終エントリーでどの区間にも入ることができず、あえて補欠に強い選手をおき、戦略的に使われる場合がある。小野選手がどの区間で出場するのか注目が集まる中、大会二日目の復路7区での出場となった。前日の往路を終えた時点で帝京大学は12位。「シード権」を獲得するためには10位内に入る必要がある。これまでは1区でチームのスターターとして活躍してきた小野



小野選手と並走しながら鼓舞する給水員の東さん（右）

自分自身、箱根駅伝があったからこそ厳しい練習にも耐えることができたと思いますし、人としても成長することができたと思います」

箱根駅伝で結果を残すことを目標に、帝京大学のエースとしてチームを牽引してきた小野選手へ今後の目標を聞いた。

「卒業後は未定ですが、陸上はこれからも続けたいと思っています。目標と言えるか分かりませんが、自分の走りを見て、陸上競技をやりたい、とか、走ることに興味を持ちました」と言ってくれる人が現れてくれればうれしいです。今回の箱根駅伝やその他の大会に出場すると、両親から『白糠の人たちも応援していたよ』『店（白糠金物センター株式会社とんかち）のお客さんが結果を気にしていたよ』というようなことをずっと聞かされていました。この大学4年間、つらいことや辞めたと思ったことが何度もありましたが、町民皆さんの言葉にずっと励まされ、助けられてきました。今まで本当にありがとうございました。私はこれからも陸上競技を続けていきたいと思っていますので、これからも今ままで変わらないご声援をよろしく願います」



（左から）末次選手、小野選手、西脇選手

選手。今回はどのような気持ちでレースに臨んだのだろうか。「箱根では1区しか走ったことがなかったのですが、大会前まで緊張と不安でいっぱいでした。ですが、これまでもずっと一緒に練習してきた西脇翔太君（1区）と末次海斗君（4区）が前日に良い走りをしていたので、自分もそれに続こうという思いでした。また、レース前に中野孝行監督から『往路の2人（西脇、末次）が良い走りをしてくれた。明日は小野がキーマンだぞ、頑張れ！』と背中を押してくれたので、やってやろうという気持ちが強くなりました」

レース中にも中野監督からの声援が小野選手の走りを後押しした。

「最初は、区間10位以内を目指して走っていたのですが、レース中に後ろを走る管理車両から『帝京記録狙えるぞ！』という中野監督の声が聞こえてきたので、そこからは区間賞を目指してスピードを上げました。結果は区間2位でしたが、前日からの良い流れをさらに良くすることができたと思いますし、自分としても満足のできる走りができました」

小野選手が好走できた大きな要因はもう一つある。「15kmの給水地点でのことですが、自分が最も信頼しているチームメイトの東陽晃君が、一番つらかったところで『頑張れ！いけるぞ！』と声をかけてくれました。きつい中でも最後までしっかりと走り切ることができたのは、こうした支えがあったからだと思います」

12位で受けた襷を通過順位を一つ上げる総合11位でつないだ小野選手。帝京大学は続く選手たちも快走を続け、総合9位でゴール。2年ぶりにシード権を獲得した。

「後輩たちにシード権を残すことができて、今はただただホッとしています。今回は、予選会から勝ち上がってシード権を獲得する、ということが、いかに大変かということのみ

んなが身をもって知ることができたので、この経験を生かして、後輩たちには今後も油断せずに箱根駅伝で結果を残せるよう、練習に取り組んでほしいと思います」

大学4年の小野選手にとっては今年が最後の箱根駅伝。これまでの4年間を振り返ってもらった。

「大学に入るまでは箱根駅伝に出場することを夢見ており、その夢はかなえることができました。その後は、夢の先といえますか、チームとして箱根駅伝には絶対に出場しなければならぬですし、その上で自分も走って結果を出さなければならぬという目標を持つようになりました」